

J.S. バッハ作曲「二声インヴェンション」の楽曲分析と演奏解釈

第15番 口短調 BWV 786

藤 本 逸 子

は じ め に

この小論に先立ち、「J. S. バッハ作曲『二声インヴェンション』¹⁾の楽曲分析と演奏解釈」²⁾と題し、「第1番 八長調 BWV³⁾ 772」から「第11番 ト短調 BWV 782」までの11曲を、「豊橋短期大学研究紀要 第2号」から「同第12号」の各号に、それぞれ楽曲分析し演奏解釈した。また、「第12番 イ長調 BWV 783」から「第14番 変口長調 BWV 785」を、「豊橋創造大学短期大学部研究紀要 第14号」から「同第16号」の各号に、同じく楽曲分析し演奏解釈した。この小論も、それらと同じ観点にたって、「第15番 口短調 BWV 786」を取り上げたものである。

楽曲分析と演奏解釈

「W. F. バッハのための小曲集」⁴⁾(以下「Kb. für W. F. B.」)において、この「Inventio 15」にあたるのは、38番めの曲で、「Praeambulum 7 (BWV 786)と題されている。両者には、装飾音・リズム・臨時記号において、表のような違いがみられる程度で、大きな違いはない。

-
- 1) 「二声インヴェンション」という呼び名については、豊橋短期大学研究紀要第2号「J.S. バッハ作曲『二声インヴェンション』の楽曲分析と演奏解釈」藤本逸子 1985年(以下「第2号における小論」)の「『インヴェンション』について」の項を参照のこと。
 - 2) 作品名・書名・強調語句は、原則として「 」に入れて表わす。
 - 3) BWV = Bach-Werke-Verzeichnis, W. シュミーダーによるJ. S. バッハ作品総目録番号。
 - 4) 「W. F. バッハのための小曲集」については、「第2号における小論」の「『インヴェンション』について」の項を参照のこと。

表 「Inventio 15」と「Praeambulum 7」の相違箇所

| Inventio 15 | | | | Praeambulum 7 | | | |
|-----------------|---------|-----------------------|---|---------------|---------|---------------------|--|
| 3 ⁵⁾ | 上声 1 拍め | Fis 音 ⁶⁾ 上 | ↔ | 3 | 上声 1 拍め | Fis 音上 なし | |
| 5 | 上声 2 拍め | Gis 音上 | ↔ | 5 | 上声 2 拍め | Gis 音上 なし | |
| 5 | 下声 3 拍め | Fis 音 Gis 音 | | 5 | 下声 3 拍め | Fis 音 Gis 音 | |
| 11 | 上声 1 拍め | G 音上 | ↔ | 11 | 上声 1 拍め | G 音上 なし | |
| 16 | 上声 2 拍め | Gis 音 Ais 音 H 音 Ais 音 | | 16 | 上声 2 拍め | Gis 音 A 音 H 音 Ais 音 | |
| 21 | 上声 4 拍め | Ais 音上 | ↔ | 21 | 上声 4 拍め | Ais 音上 なし | |

楽 曲 分 析 (譜 1⁷⁾ 参 照)

この曲は、二つの部分からなり、それぞれの部分は、次のような構成になっている。

第 1 部 1 ~ 11 (11)

主 題 1 ~ 7 (6.5)

間 奏 7 ~ 11 (4.5)

第 2 部 12 ~ 22 (11)

主 題 12 ~ 15 (4)

間 奏 15 ~ 17 (2)

主 題 18 ~ 22 (5)

各部分における楽曲分析

第 1 部

主題

1 ~ 2 ・ 1 ~ 2 上声部に主題(T)が現われる。(T)は、十六分音符で短2度上下する要素(a)、八分音符で跳躍後短2度上下する要素(b)、同じく八分音符で跳躍後同じ音から長2度下る要素(c)から成り立っている。

・ 1 ~ 2 下声部には、ゲネラルバス(GB)がある。その前半にあたる1 は、拡張された(a)の反行形(xv)である。その後半の2 は、3度の跳躍進行を2回ゼクエツさせた(d)である。

3 ~ 5 ・ 3 ~ 5 下声部では、属調 fis moll⁸⁾で(T)が出てくる。この(T)は、1 ~ 2 上声部の(T)とは違い、後尾が変化延長して、カデンツ的動き(k)がついている。それによって、確固とした fis moll の終止感が得られる。

・ 3 ~ 5 上声部には、(GB)を装飾的に変奏して作出した対旋律(G)が置かれている。

5 ~ 7 ・ 5 ~ 7 は、3拍めより、3 ~ 5 の上声部下声部を入れ替えて、(T)(G)を奏

5) 小節数は、数字を で囲むことによって表わす。例、第4小節め 4, 第3小節めから第10小節め 3 ~ 10。

6) 音名は、原則としてドイツ音名で表わす。例、変口音 B 音、嬰へ音 Fis 音。

7) この小論における「Inventio 15」に関する楽譜は、Johann Sebastian Bach「Inventionen und Sinfonien」Urtext(Barenreiter-Verlag, Kassel 1972)を用いている。国内においては、ベーレンライター社の許可を得て、全音楽譜出版社が、印刷出版している。

8) 調名は、原則として、ドイツ音名を用い、ドイツ音名の太文字は長調、小文字は短調を表わす。例、八長調 C dur あるいは C:、イ短調 a moll あるいは a:。

している。ただし、後尾は、主調のh mollに戻る準備のために変化しており、3 ~ 5 のような(k)はついていない。

間奏

- 7 ~ 9 ・ 間奏は 7 3 拍めから始まる。
 - ・ 7 上声部は、7 下声部 1 ~ 2 拍をオクターブ上に移した形になっている。ただし、Eis 音は、E 音になっている。そのことによって、fis moll から h moll に戻る。
 - ・ 7 下声部は、7 上声部 1 ~ 2 拍を 5 度下げた形になっている。上声部同様、それによって、fis moll から h moll に戻っている。
 - ・ 8 上声部は、(G)に含まれる音形を利用して、♪♪♪♪のリズムで 6 度上行している。
 - ・ 8 下声部は、八分音符で、順次下行して 4 度下がり、順次上行して 4 度上がっている。
 - ・ 9 は、両声部とも、8 を 2 度下でゼクエンツしている。
 - ・ 7 ~ 9 の間に、h moll から D dur に転調している。
- 10 ~ 11 ・ 10 上声部は、8 上声部 1 拍めの音形を使って、2 度ずつ下行するゼクエンツを行っている。
 - ・ 10 下声部は、8 度と 4 度跳躍させる音形で 2 度ずつ下行している。
 - ・ 11 下声部は、10 上声部に準じた形になっているが、第 1 部を終止させるため、後尾が変化している。
 - ・ 11 上声部は、1 拍めに(a)を置いた後、6 度跳躍する音形をゼクエンツするさせて、2 度ずつ下行している。
 - ・ 両声部とも、12 最初の D 音に至り、第 1 部を D dur で納めている。

第 2 部

主題

- 12 ~ 13 ・ 12 ~ 13 下声部に、主調の平行調である D dur の(T)がある。1 ~ 2 で後尾が、主調 h moll から属調の fis moll に転調したように、ここでも、D dur から属調の A dur に転調している。
 - ・ 12 ~ 13 上声部には、(G)がある。その後尾は、14 上声部の(T)を先取りした形に変化しており、14 上声部の(T)の出だしにストレッチ的效果を与えている。
- 14 ~ 15 ・ 14 ~ 15 には 12 ~ 13 の両声部を入れ替えた形で、A dur の(T)(G)がある。双方ともその後尾は、16 に続く間奏の音形に変化しており、(T)も(G)も次の間奏に中断されることなく続いている。

間奏

- 16 ~ 17 ・ 16 上声部 1 ~ 2 拍には、(G)をなす音形の反行形と逆行形を組み合わせたものが置いてある。3 ~ 4 拍は、それを 5 度上でゼクエンツしている。
 - ・ 16 下声部 1 ~ 2 拍は、八分音符で 4 度順次下行している。3 ~ 4 拍は、それを 1 オクターブと 4 度下でゼクエンツしている。この 4 度下のゼクエンツは、上声部

の5度上のゼクエンツと反行した形になっており、音域をより広くすることによって、ダイナミック性を増す効果を出している。

- ・ [17] は、[16] の変奏である。
- ・ [17] 上声部は、1拍と3拍の最後の音を1オクターブ下げることによって躍動感を持たせている。
- ・ [17] 下声部は、[16] が4度順次下行するモチーフであったものを、4度順次上行の形にしている。また、(a)のリズムを利用して1オクターブ跳躍する動きを加え、ここでも躍動感を増している。
- ・ [16] ~ [17]、この間で、A dur から h moll に転調し、主調に戻っている。

主題

- [18] ~ [19] ・ [18] ~ [19] の下声部に、主調 h moll の (T) が現れる。その後尾は、次に続く上声部の (T) に対する (G) に間断なく続くよう変化している。それはまた、[19] 3拍めから始まる上声部の (T) と呼応して、ストレッチ的効果を出している。
- ・ [18] ~ [19] 上声部には、(G) がある。その後尾は簡素にされ、[19] 3拍めからの (T) に、即、繋がっている。
- [19] ~ [22] ・ [19] 上声部3拍めより、この曲最後の (T) が現れる。その拡張された後尾は、[21] で (k) となり、[22] の H 音に至って、この曲を締めくくっている。
- ・ [19] 下声部は、4拍めから (G) が始まる。その後尾は、[21] で、(a) と (d) の凝縮された反行形 (P) によって拡張変化し、(k) に続いている。下声部も上声部同様、[22] の H 音に至って、この曲を終えている。

演奏解釈 (譜2参照)

テンポ

テンポに関して、諸校訂版⁹⁾は、表のような指示をしている。

表 諸校訂版における「Inventio 15」のテンポに関する指示

| 校訂者 | テンポに関する指示 |
|-------------------|----------------------------|
| Hans Bicschhoff | Allegro comodo ♪ = 96 |
| Ferruccio Busoni | Moderato ma con spirito |
| Alfredo Casella | Allegro ma non troppo |
| S. A. Durand | Allegro non troppo |
| Edwin Fischer | Allegro comodo |
| Vilém Kurz | Allegro non troppo |
| Gin Enrico Moroni | Allegro non troppo ♪ = 104 |
| Bruno Mugellini | Allegro moderato ♪ = 92 |
| Julius Rötgen | Allegro ♪ = 88 |
| John Thompson | Allegro non troppo |

9) 各校訂版及び、各CDの出版については、本小論の「参考文献・参考楽譜・参考CD」の項を参照のこと。

また、内外 11 人の演奏時間⁹⁾は、表 のとおりである。

表 諸演奏家における「Inventio 15」の演奏時間

| 演奏者 | 録音年 | 楽器 | 演奏時間 |
|----------------------|-------------|---------|------|
| Aldo Ciccolini | 不明 | ピアノ | 1 32 |
| Christoph Eschenbach | 1974 年 | ピアノ | 1 09 |
| Glenn Gould | 1963 ~ 64 年 | ピアノ | 0 51 |
| Tatyana Nikolayeva | 1977 年 | ピアノ | 1 28 |
| András Schiff | 1982 ~ 83 年 | ピアノ | 1 11 |
| 高橋 悠治 | 1977 ~ 78 年 | ピアノ | 1 09 |
| 田村 宏 | 不明 | ピアノ | 1 00 |
| Kenneth Gilbert | 1984 年 | チェンバロ | 1 11 |
| Gustav Leonhardt | 1974 年 | チェンバロ | 1 18 |
| Helmut Walcha | 1961 年 | チェンバロ | 1 22 |
| Don Dorsey | 1985 年 | シンセサイザー | 1 01 |

演奏時間の差は、チッコリーニとグールドでは、2倍近い差がある。チッコリーニは、荘重さ雄大さを感じさせる落ち着いた演奏であり、グールドは、速いというよりあっさりした演奏である。高橋は、テンポ的にはゆったりしていないが、装飾音を多用して優雅さを出している。

筆者は、「Allegro ♩ = 100」というテンポをとる。軽やかに清々しく演奏したい。

アーティキュレーション

全曲を通じて、優雅さより *leggero* さを求めたい。十六分音符は、決して *non legato* にするわけではないが、軽さを持った *legato* でありたい。八分音符は、おおむね *non legato* であるが、テーマの八分音符は、*staccato* に近い。区切りを感じる場所は (|)、プレスがほしいところは (V) で示した。

装飾音

「Praeludium 7」にはなく、「Inventio 15」に、新たに加えられた装飾音には、強い必要性を感じない。[4]と[11]の装飾音は、なくても良いと感じる。装飾音の加え方は「譜2」に小音符で記した。

各部分における演奏解釈

[1] ~ [2]・P が出る。

・上声部(T)は、[2]2拍め Cis 音に向かって、少し *cresc.* する。この Cis 音が、(T)のクライマックスである。[2]3拍めの十六分音符から[3]の頭にかけて、ほんの少

し *dim.* して、(T)を納める。下声部は、Pではあるが、ゲネラルバスらしい深みのある太い音で(T)を支える。

- ③ ~ ⑤
- 下声部の(T)は、① ~ ②の(T)より、音量を加え *mp* とする。②上声同様、(T)のクライマックスである④2拍めのGis音に向け、少し *cresc.* する。⑤2拍めのカデンツ的動きで少し *dim.* し、3拍めのFis音に(T)を納める。ただし、音量はあまり落とさない。
 - 上声部の(G)は、軽やかな *legato* で、下声部の(T)に主張すぎないように絡む。④3拍めのCis音は、*ten.* 気味にして、存在感を出す。④4拍 ~ ⑤1拍は、上行する音の動きにそって、少々 *cresc.* する。⑤2 ~ 3拍めは、下声部に準じる。
- ⑤ ~ ⑦
- ⑤ ~ ⑦は、*mf* とする。
 - 上声部は、軽やかに元気を加え、高らかに(T)を奏でる。⑥は、4拍め(T)のクライマックスGis音まで、伸びやかに *cresc.* する。⑦は、十六分音符の動きに合わせ少し *dim.* し、3拍めの頭のFis音に納める。
 - 下声部の⑥の(G)は、上声部に合わせ、軽く *cresc.* する。⑦1 ~ 2拍は、(a)の動きを *poco marc.* で主張し、その動きを上声部の⑦3 ~ 4拍の(a)の動きに受け渡す。
- ⑦ ~ ⑨
- 上声部⑦3 ~ 4拍は、下声部⑦1 ~ 2拍を受けて、(a)の動きを *poco marc.* で主張する。⑧ ~ ⑨は、♪♪♪♪のリズムに乗せて6度順次上行する音にそって *cresc.* する。特に⑨は、第1部最大のクライマックスである⑩の頭のH音に向けてエネルギーを蓄えた *cresc.* をする。
 - 下声部⑧ ~ ⑨は、3 ~ 4拍の順次上行する音にそって *cresc.* する。
- ⑩ ~ ⑪
- ⑩ ~ ⑪は、*f* とする。
 - 上声部は、⑩頭の第1部最大のクライマックスを豊かに響かせ、その余韻の中で、⑩全体を伸び伸びと奏でる。⑪は、動きを下声部に譲って、落ち着いたあるリズムを刻み、少し音量を落として、⑫頭のD音に第1部を納める。
 - 下声部は、深みのある豊かな音量で⑩頭のG音を奏し、クライマックスを支える。⑩の八分音符は、そのまま豊かな音量で落ち着いたリズムを刻み、4拍めの最後のD音は、*ten.* 気味に *accento* をつけ、シンコペーションを楽しむ。⑪は、⑩の上声部の動きを受け継ぐが、3 ~ 4拍で少し音量を落として、上声部同様、⑫頭のD音に第1部を納める。
- ⑫ ~ ⑬
- ⑫ ~ ⑬は、落ち着いた *mf* とする。
 - 下声部の(T)は、⑬2拍めE音の(T)のクライマックスに向けて少々 *cresc.* する。⑬4拍 ~ ⑭1拍の(a)の動きは、*poco marc.* として主張し、⑭上声部の(T)に受け渡す。
 - 上声部⑫ ~ ⑬は、(G)を軽やかな *mf* で奏でる。
- ⑭ ~ ⑮
- ⑭ ~ ⑮は、エネルギーが内在する *mp* とする。
 - 上声部は、出だしの(a)を *poco marc.* して、⑪からの下声部の(a)を受けながら、

- (T)を始める。[15] 2拍めのH音に向けて、少々 *cresc.* し、すぐ納めて間奏に入る準備をする。
- ・下声部は、(G)を静かに奏でる。
- [14] ~ [16] ・ [16] は、*mf*で始める。
- ・上声部は、バッハ自身の筆による *legato* を充分意識して、*cantabile* に十六分音符を奏でる。
 - ・下声部は、4度順次下行する四つの八分音符の塊を意識する。
 - ・両声部とも、その音の広がりに合わせて[16]で一気に *cresc.* し、そのエネルギーをこの曲最大のクライマックスである[17]頭の音に持って行く。
 - ・[17] は、両声部とも *f* で豊かに響かせ、音の跳躍による躍動感を楽しむ。[17] 4拍めは、少し納める。
- [18] ~ [19] ・ [18] ~ [19] は、決然とした *f* である。
- ・下声部は、(T)にはっきり主張をさせる。[19] 2拍め Cis 音の(T)のクライマックスへゆったりと *cresc.* する。そのまま次の(G)に入る準備をする。
 - ・上声部は、(G)を上声部の(T)にそって *cresc.* させる。
- [19] ~ [22] ・ [19] ~ [22] は、[18] ~ [19] の流れにそってゆるやかに *cresc.* し、堂々とした雰囲気を保つ。
- ・上声部は、[19] 3拍めの(T)の出だしを、*poco marc.* し、ストレッチ的效果を出す。最後の(T)のクライマックスである[20]の4拍めのCis音にむけて厚みのある音で、*cresc.* する。[21] は、3拍めのD音に向けてエネルギーをためていき、4拍めで少しテンポを幅広くとり、[22]のH音で堂々とこの曲を閉じる。
 - ・下声部の(G)は、上声部の(T)にそって、余裕のある *cresc.* をし、[22] 4拍めの(k)は特に堂々と響かせ、上声部同様、[22]のH音でこの曲を閉じる。

お わ り に

「Inventio 15」は、対旋律が明瞭で、フーガ的な作品である。「Inventio」では、他に、5・6・9・11・12番が、その仲間である。「Inventio 15」は、また、「Inventio」の最後の曲にふさわしい清々しく堂々とした曲でもある。

この小論をもって、「二声インヴェンション」の全曲を楽曲分析と演奏解釈したことになる。「三声」も引き続き、楽曲分析と演奏解釈を行っていきたい。

譜1 「Inventio 15」BWV 786 [1] ~ [22] (楽曲分析)

第1部
主題

1

h: fis: GB

4

fis: T

6

fis: h: G

8

h: D:

10

D:

12 第2部主題

D: A:

A: G:

16 間奏

A: h:

18 主題

h: T:

h: G:

譜2 「Inventio 15」BWV 786 [1] ~ [22] (演奏解釈)

1 *p* simile Tのクライマックス (w)

4 Tのクライマックス *mf*

6 Tのクライマックス *poco marc.*

8 *poco marc.*

10 第1部最大のクライマックス *f* (w)

12

mf Tのクライマックス

poco marc.

14

poco marc. Tのクライマックス

mp

16

cantabile 最大のクライマックス

mf *f*

18

poco marc. Tのクライマックス

決然とした *f*

20

cresc. Tのクライマックス

幅広くテンポをとって堂々と

参考文献・参考楽譜・参考CD

* 参考文献

市田儀一郎 1983年「バッハ・インヴェンションとシンフォニア」(音楽之友社)

山崎孝 1984年「バッハ・インヴェンションとシンフォニア」(ムジカノーヴァ)

* 参考楽譜

Johann Sebastian Bach「Klavierbüchlein für Wilhelm Friedemann Bach」Urtext (Barenreiter-Verlag, Kassel 1979)

BACH「Inventionen und Sinfonien」Urtext (Barenreiter-Verlag, Kassel 1972)

J. S. BACH「Inventionen Sinfonien」Urtext (G. Henle Verlag, München 1978)

J. S. Bach「Inventionen und Sinfonien」Urtext (Musikverlag Ges. m.b. H & Co., K. G., Wien 1973)

BACH「INVENTIONEN UND SINFONIEN」Urtext (Edition Peters, Berlin 1933)

Johann Sebastian Bach「TWO- and THREE-PART INVENTIONS」Facsimile of the Autograph Manuscript (Dover Publications, Inc., New York 1978)

Johann Sebastian BACH「TWO-PART INVENTIONS」Hans Bischoff (Belwin Mills Publishing Corp. N.Y.)

J. S. BACH「15 INVENTIONEN」Hans Bischoff (Steingraber Verlag, Offenbach)

BACH「TWO- and Three-Part Inventions」Ferruccio Busoni (G. Schirmer, New York 1967)

BACH「INVENZIONI A DUE VOCI」Alfredo Casella (Editioni Curci, Milano 1982)

J. S. BACH「Inventions à 2 et 3 voix」Durand S. A. (Editions Musicales, Paris 1957)

J. S. BACH「ZWEISTIMMIGE INVENTIONEN」Edwin Fischer (Wilhelm Hansen, Musik-Forag, Copenhagen 1954)

JOH. SEB. BACH「15 Zweistimmige Inventionen」Alfred Kreutz (Edition Schott, Mainz 1916)

BACH「DVOUHLASE INVENCE A TRIHLASE SINFONIE」Vilém Kurz (Editio Supraphon, Praha 1981)

BACH「15 INVENZIONI A 2 VOCI」Gino Enrico Moroni (Carisch S. p. A. Milano 1944)

BACH「INVENZIONI A DUE VOCI」Bruno Mugellini (G. Ricordi & C., Milano 1983)

JOH. SEB. BACH「ZWEI- UND DREISTIMMIGE INVENTIONEN」Julius Rötgen (Universal Edition, Hungary 1951)

BACH「THE TWO-PART INVENTIONS」John Thompson (The Willis Music Company, Cincinnati)

長岡敏夫編「バッハ インヴェンションとシンフォニア」原典版(音楽之友社 1965)

角倉一朗校訂「バッハ・インヴェンションとシンフォニア」原典版(カワイ出版 1983)

全音楽譜出版社出版部編「バッハ インヴェンション」(全音楽譜出版社)

Hans Bischoff 角倉一朗訳「J. S. バッハ インヴェンションとシンフォニア」(全音楽譜出版社 1972)

Ferruccio Busoni 伊藤義雄訳「二声インヴェンション」(Breitkopf & Hartel, Frankfurt 1914)

井口基成「バッハ集 二声部インヴェンション 三声部インヴェンション 小前奏曲・小フーガ」(春秋社 1983)

千倉八郎編「バッハ インヴェンションとシンフォニア」(日音楽譜出版社 1983)

* 参考CD

Aldo Ciccolini (Piano)「J. S. BACH INVENTION」TOCE6601 (TOSHIBA EMI)

Christoph Eschenbach (Piano) 1979「INVENTION & SINFONIA」F26G20323 (POLYDOR)

Glenn Gould (Piano) 1989「BACH INVENTIONS & SINFONIAS」28DC5246 (CBS SONY)

Tatyana Nikolayeva (Piano) 1986「J. S. Bach INVENTIONS AND SINFONIAS」VDC-1079 (VICTOR)

András Schiff (Piano) 1985「J. S. BACH 2 & 3 PART INVENTIONS」FOOL-23100 (POLYDOR)

高橋悠治 (Piano) 1991「インヴェンションとシンフォニア 他」COCO-7967 (NIPPON COLUMBIA)

田村宏 (Piano) 1989「J. S. バッハ インヴェンション」CG-3722 (NIPPON COLUMBIA)

Kenneth Gilbert (Cembalo) 1985「J. S. BACH INVENTIONEN UND SINFONIEN」POCA-2113 (ARCHIV)

Gustav Leonhardt (Cembalo) 1992「バッハ：インヴェンションとシンフォニア」BVCC-1863 (BMG VICTOR)

Helmut Walcha (Ammer-cembalo) 1961「J. S. バッハ / 2声部のためのインヴェンション & 3声部のためのシンフォニア」TOCE-7231 (TOSHIBA EMI)